國學院大學学術情報リポジトリ

〔研究ノート〕国際的な移民と異種混淆文化の研究：在琉中国人と沖縄系ブラジル人を例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 欣雄, Watanabe, Yoshio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000260

〔研究ノート〕

国際的な移民と異種混淆文化の研究
―在琉中国人と沖縄系ブラジル人を例として―

渡邊欣雄

一、人の国際的移動に伴うハイブリッド文化の研究

一九八〇年代後半から九〇年代にかけて、日本でもこれまでの文化研究のあり方が問われて始めていた。問われたのは、研究者の「単一」で「同質」、かつ「固有」の文化観であり、それにもとづく従来の研究だった。日本文化の研究を例にするなら、日本文化は日本という国土に住む日本国籍を持つ日本人が担い手であり、かつ日本人なら国内に地域性はあるにせよ、他国とは異なる同質・同源の文化を持つ存在だとされるような文化観に由来していた。

しかし、人類学・先史学・考古学などによる、戦後の一時期隆盛を見た「日本民族起源論」だけでなく、多くの日本人起源論は上記の文化観を否定するような説を唱えて来た研究史があり、しかも現在の日本の国境こそは二〇世紀の、しかも戦後確定した領域にしか過ぎないことは、われわれの常識とも言える

ことである。言い換えるなら、国境を越えて、かつてもいまも海外に日本人がいなかったわけではないし、また日本国内に海外出身の日本人や外国人が住んでいないわけではない。海外にいる日本人も日本文化を保持しているし、国内の外国人も日本文化を担っている。

わたしがいま関心を持っているのは、戦後の「多民族国家日本論」ではない。すなわち、文化そのものが民族ごとに初めから「単一」、「同質」、「固有」だったという前提や、同じ列島内に住む古代および現代の人びとのマジョリティだけを起源論や文化論の対象とし、新しく渡来した人びとを排除して研究するような立場ではない。したがってマイノリティからマジョリティをも含めて文化を考える立場や、文化がむしろ初めから「複数」で「異質かつ併存」的で、したがって互いに「混ざり合い」ながら形成されてきたという立場を取る、ハイブリッドな文化を研究する近年の人文社会科学の姿勢を踏襲した研究を行おうとすることなのである。

このような姿勢で、わたしはこれまで幾度か研究成果をあげてきたが（たとえば渡邊欣雄編『沖縄文化の創造』、勉誠出版、二〇〇三年など）、このたび紹介したい研究は、ここ数年調査研究してきた成果の一部で、まだ十分な分析がなされていない成果である。その成果はこれまで地域別、民族別に数種あるのだが、ここでは「沖縄」をキイワードとした移民と文化の異種混淆性を問題とする。すなわち第一に、沖縄に移住してきた中国人の研究、「在琉中国人」研究と、第二に沖縄からブラジルに移民した人びとの研究、「沖縄系ブラジル人」研究の簡単な紹介である。

二、在琉中国人研究

ア、「在琉中国人」とは

この研究は、「在華日本人研究」（『國學院雑誌』第一一四巻第三号、二〇一三年）に続く、わたしの最近の「日本研究」の簡単な紹介である。ここにいう「在琉中国人」とは沖縄に住む中国人のことなのだが、「在琉中国人」として一括できるほど単純なカテゴリーではない。沖縄に住む「中国人」には、大別して四種あるからである。

中国大陸出身の日本国籍の中国人（大陸華人）、中国大陸出身の中国国籍の中国人（大陸華僑）、台湾出身の日本国籍の台湾人（台湾華人）、および台湾出身の中華民国（台湾）国籍の台湾人（台湾華僑）の四種である。ただし沖縄を考える上で、

さらに重要な元中国系の人びとがいる。琉球国時代に中国から沖縄に渡り、帰化した「閩人三十六姓」（一四世紀）の子孫で、現在の「久米崇聖会」の人びとである。かれら歴史時代における大陸からの渡来人を含めると五種になるが、従来研究も多いので、ここではあまり問題としない。

問題としたい「沖縄文化」も「沖縄を含めた日本文化」も、そして今日に至る「移民」や外国人の日本定住、それに伴う「混淆文化」としての日本文化も、おおかたは明治維新以後の日本近代以降の社会現象であり、こうした日本の国民国家のあり方が「在琉中国人」というカテゴリーによる認識を生み、問題対象視しうる時代に立ち至っている。したがって近代以前の「閩人三十六姓」の現代生活については、当面は対象外としたい。さて、これら四種の在琉中国人のなかで、沖縄に住んだ近代以降の歴史の古い台湾系華僑華人について、まずは簡単に紹介しておきたい。

イ、台湾系「在琉中国人」略史

一般に中国人（華人・華僑）は、海外で移民組織を作ることはよく知られている。台湾系の人びとの場合、組織を「琉球華僑総会」と称している。「総会」というのは日本語とは違い移民の互助会をいうが、かれらの場合、一九七一年に発足したという。

「華僑総会」は戦後発足したのだが、もともと台湾系の人びとの沖縄移住は戦前から行われており、一九三〇年代の石垣島への移住が最初だった。当時、台湾ではパイナップル栽培が成功しており、それを沖縄に持ち込み、また水牛も搬入したのである。ただし当時、台湾は日本領だったので、「在琉中国人の沖縄移民史」にはならなかった。

台湾系の人びとが「外国人」になった戦後、そして「華僑総会」ができる以前にも台湾系の人びとは沖縄で生活していた。一九六〇年代、台湾系の人びとはアメリカ軍の基地で労働者として、基地周囲で家具を米軍に売る商人として、また軍需物資の解体処理を行う専門職人として、あるいはまた中華料理の料理人として、さらには中国大陸からの中国語電波を傍受する米軍基地の翻訳者として働いていた。また米軍基地内にある学校を出て、アメリカに留学した者もいた。

このように戦後もかなりの台湾系の人びとが沖縄で生活していたが、一九七一年になり「移民団体結成」のやむなきに至ったのである。

沖縄の日本復帰は一九七二年五月であった。台湾系の人びと

にとって不幸な出来事は、その年一〇月の日本の中国との国交回復であり、日本の台湾（中華民国）との国交断絶だった。その年に沖縄の台湾系の人びとは、「無国籍」になってしまった。日本政府は中華人民共和国を認め、中華民国（台湾）を認めなくなったからである。そのため日本に住む台湾系の人びとは、日本政府と交渉すべく、在日・在琉の自治組織である「華僑総会」を通じて交渉活動を開始した。

交渉の過程で、一九七五年、日本政府はかれらに対して、「日本に帰化したらどうか」と勧めたのである。いまもってそうなのだが、めったに外国人の帰化を許さなかった日本政府が、この時期の台湾系の人びとの日本への帰化を容易にしようとした。こうして一九七五年から八〇年までの間に、およそ九割の台湾系の人びとが日本国籍を取得したとされる。台湾出身者にほとんど犯罪者がいなかったことが幸いしたらしい。

こうした一連の日本政府の台湾に対する特別措置が、日本にとっても沖縄にとっても好影響を及ぼしたことがある。それまで台湾の中華民国政府は沖縄を日本領だと決して認めることはなかったのだが、ようやく民進党政権下の二〇〇四年ごろになって認めるようになり、今日に至っていることである。それまで台湾系の人びとは、中華民国の国籍を持っていても帰国にはビザを必要とした。海外の台湾人を中華民国政府は、スパイではないかと疑っていたからである。当時は「華僑総会」がビザを代理発行しており、だから沖縄に台湾系の人びとは五、八〇〇人いたことがわかっているという。多くの在琉台湾人が、その後日本国籍を獲得しており、日台間の協定により日本人（日本国籍者）は台湾入国に際してビザは必要ではなくなっている。

ウ、台湾系「在琉中国人」の生活簡介

このような良好な日台間の国際関係のなかで、いまかれら台湾系の人びとの悩みは、会員の台湾へのアイデンティティそのものだという。日本国籍なら、あえて台湾に帰属意識を持たない者も出てくるわけである。しかもいまの日本は中国に関心が向いていて、台湾に関心が薄い。台湾系の人びとは現在沖縄におよそ二万人はいるはずなのだが、こんな日本の状況が影響して、台湾への帰属意識を持った者は四、〇〇〇人いるかどうかなのだという。

さて、「華僑総会」が行っている活動だが、それは基本的には在琉会員間の懇親活動である。旧暦一月一五日の「元宵節」、一〇月一〇日の国の祝いである「双十節」などを実施している。舞踊サークルもあるし、また台湾系華商の組織として「琉球台

湾商工会」もある。台湾系の人びとが出資して建てた「華僑ビル」も那覇にあり、「閩人三十六姓」の子孫たちの組織である「久米崇聖会」にも、寄付を行い彼らの行事にも参加しているという。

このように複雑で長い歴史を経験してきた台湾系の人びとだが、他方で大陸系の人びともまた、沖縄で新たな活動が始まっている。

エ、大陸系「在琉中国人」の活動

大陸系の人びとは二〇〇二年に、台湾系の組織とは別に民間の非営利団体として「沖縄華僑華人総会」を結成し、積極的に在琉中国人と沖縄人の民間交流を開始した。しかし二〇〇九年、メンバー間の意見などの違いがあり、「新華僑華人総会」が新たに結成されて、これまでの活動を引き継いだ。現在沖縄に大陸系の人びとはおよそ三〇〇〇名がいるが、「新華僑華人総会」の会員のうち日本で会社経営している男性などは「華人」が多く、サラリーマンであれば、かならずしもそうではないという。逆に女性は沖縄人との国際結婚が多いのに、日本国籍を持たない「華僑」が多くなっているという。

要するにたびたび中国に帰らねばならない中国人は「華僑」という地位のほうが便利だし、日本でずっと仕事をせねばならない中国人は、日本国籍を取得して「華人」になるほうが好都合である。

しかし、概して両者にさほどの差はないという。そもそも沖縄にいる中国人は、全体として沖縄に違和感がない。もともと沖縄には中国から輸入した文化が多く、起源が同じ過去の中国文化が現代の沖縄に多く残されている、ともいえるからである。大陸系の人びとの組織は、このように台湾系に比べてかなり新しい。

オ、小括：「在琉中国人」から「日本」を再考する

さてここに簡単に紹介した、わたしの「在琉中国人」の研究が、なぜ「日本研究」そのものであり、民俗学にとっても文化人類学にとっても注目すべき現代的課題なのか。

まずは統計的な「在琉外国人」から考える。沖縄在住の外国人は二〇一〇年時で七、六五一人とされ、日本で三〇位とされていた。この統計数字は意外である。数百年にわたり鎖国がなく、海外交流がずっと盛んだった沖縄に、はたして居住する外国人がそんなに少ないのだろうか？いや、そうではないのである。

この統計にはアメリカ軍家族の人口四四、九六三人が含まれていないし、日本国籍を取得した「華人」は日本国籍だから、むろん含まれていない。すでに述べたように国籍を問わず沖縄に住む中国人は、推定で二三、〇〇〇人もいる。聞いた話では在琉中国人にとって国籍は便宜上の身分や資格に過ぎないし、ましてや台湾系の人びとは国交断絶により日本国籍を取得せざるをえなかったことは、すでに述べた。国籍こそ「人為的」な表象にすぎないわけである。実際は米軍家族のように在琉外国人が多いだけでなく、帰化してきた台湾人が多数を占める地域こそ沖縄であり、それだけに「日本とは何か」、「日本文化とは何か」について深く考えざるをえない地域になっている。

第一に原籍にアイデンティティがなくなりつつある彼らもまた正当な「日本人」であり、かつ彼らの言語や文化は日本と原籍の二重であり続けるかもしれない。彼らの言語や文化を日本言語や文化と認めずして、果たして「日本」が語れるだろうかということである。

「閩人三十六姓」の子孫たちは、沖縄姓（日本姓）と中国姓の二重の姓名をいまでも保持している。かれらの二重姓、したがって二重のアイデンティティを認識しないで、「久米系士族の文化」が理解できるだろうか。そんなことを考えただけでも、この問いかけが理解できるのではなかろうか。

第二に国籍は便宜的なものだという彼らは、多くは日本と原籍との間を行き来する生活者である。このようなトランス・ボーダーの人びとを「日本」の視野に入れることで、彼らが移出入している「日本」の言語や文化もまた、トランス・ボーダーとなっているはずである【写真1】。

すなわち日本と中国、あるいは台湾の国境を越えて、人が携える「言語や文化」は容易に両国の「言語や文化」として共有されている。国境があるように見える「日本」は、彼らの移住・帰化と彼らの言語・文化などにより実際には国境がなくなり、かつ「日本」そのものがハイブリッドな性質を帯びたものになってくる。

すなわちいま世界に普及している「和

【写真1】毎年名古屋で行われている「中国春節祭」の舞台風景

食」のなかで、最もよく普及している「ラーメン」料理こそは、中国にまねながら日本で発明された「ハイブリッド」な「和食」と言えるわけで、「沖縄料理」とて、その例外ではない。そんな混淆文化が沖縄にかかわらず、いま日本各地に創られ続けている。

「日本」のこれからの社会や文化のあり方を示すだろう人びとが、彼ら「在琉中国人」だと思い、二〇〇三年、科研費により那覇で簡単な調査を行った次第である。

三、沖縄系ブラジル人研究へ

ア、日本のなかの沖縄から世界のなかの沖縄へ

総じて「移民研究」を通して考える「日本人」および「日本」の研究。その例を前章では沖縄県に求めたわけだが、ここでは、ブラジルの沖縄系移民を課題にとりあげてみる。

わたしの沖縄研究はすでに五〇年近くになりつつある。初めは日本の一部としての沖縄、日本理解のための沖縄に関心を持っていたが、やがて沖縄そのものの独自性に気づき、日本とは別の沖縄論を幾度か展開してきた。さらに進んでその後は沖縄を中心として世界全体を考えるようになり、いまは沖縄を中心としたヒト・モノ・カネ・情報のグローバルな世界情勢に関心を抱くようになっている。その一つがここで話題とする「ブラジルへの沖縄移民」である。

わたしの沖縄への関心は、前章の沖縄への中国系移民に対する関心を含めて、もはや国境がなくなるまでになったが、しかし「沖縄移民」の研究はすでに多くの研究が蓄積されており、先行研究を差し置いてわたし自身の見解の独自性を示すことはもはや困難である。そこで先行研究を参考にしながら（石川友紀「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」『移民研究』一号、二〇〇年ほか）、簡単に沖縄系ブラジル人の歴史的意義と特徴を記しておきたい。

イ、沖縄の海外移民略史

早い時期から沖縄は、海外に移民を出さざるをえない環境下にあった。一八七九年の沖縄の事実上の日本領土化（沖縄県の設置）以後、とくに沖縄の士族は俸禄を失い、県内での地方寄留化が進むとともに、狭小な県土と疲弊した経済ゆえに海外への移住が試みられてきた。その最初が一八八五年の、ハワイへの移民だった。以後二〇世紀に至っても、ハワイを中心として太平洋諸島やメキシコ、ペルーへの移民が継続的に行われた。

ブラジルへの沖縄からの移民は、日本本土と同じ一九〇八年の笠戸丸による移民だったが、ブラジルに渡った七八一人中、三二五人という多数が沖縄系だったことは注目すべきだろう。

こうして多数の沖縄移民がブラジルを含めて世界に展開したが、沖縄移民の故郷沖縄県との関係は特異で、大正末期から昭和初期にかけての時代、疲弊した故郷＝沖縄は移民からの送金によってなりたっていた。当時は「出稼ぎ移民」意識が圧倒的だったとはいえ、たとえば一九二九年の沖縄県の歳入額のほぼ三分の二が移民による送金によっていたとされ、その後も県財政に占める移民送金の割合は、決して減ずることはなかった。こうした沖縄の特殊事情があったがために、ブラジルを除けば太平洋諸島や中南米各国への日本移民のうち、すべての地域で多数を占めたのは沖縄系移民だった。ブラジルでさえ戦後は日本からの移民の第一位を占めており、日系社会のなかでも沖縄系は特異な地位を占めるまでになっている。太平洋戦争の戦場となり、かつ米軍統治下となった故郷沖縄。ブラジル同様に戦後の沖縄系移民は世界各地で増加し、海外に渡った移民たちが「戦災沖縄復興運動」を興し、送金だけでなく生活物資の支援も行われ、また沖縄県内でも戦前にあった官民あげての移民促進と支援組織「沖縄（県）海外協会」を再発足させるほどだった。

ウ、沖縄系移民の現状簡介

したがってこうした歴史的経緯があるために、ブラジルに限ってもいまや最大の県人会の会員数を誇っており、盛んな県人会活動やコミュニティ活動、独自の芸能や祭典の実施、沖縄アイデンティティを表象する独自の食材や方言教育の普及、そして結果としてのブラジルにおける多数の成功者の存在があり、日系の他の団体を圧するほどの顕著な特徴があるといえる。

全世界の日系移民の一割強を占めるほどになった沖縄系移民は、一九九〇年、全世界の「ウチナーンチュ」（沖縄人）を集めて「世界のウチナーンチュ大会」を沖縄県内で実施した。そのほかいまに至るまで、沖縄県と移民先とのグローバルな政治的、経済的、文化的交流が毎年行われていることも、「日系」という括りだけでは理解できない沖縄系移民社会の独自性があると思われる。

いまやブラジルには沖縄料理あり、沖縄舞踊・芸能あり、沖縄用品あり、沖縄語（沖縄方言）あり、そして沖縄に対するアイデンティティありの時代になっている。とくに「沖縄そば」は、ブラジルの蕎麦料理を代表するまでになっている。そば（soba）

と言えばブラジルでは「沖縄そば」のことであり、カンポグランデ市の文化遺産にまでなっている。

ブラジルの地方都市の文化遺産にまでなっている沖縄文化。したがってブラジルにおける沖縄文化は、単に沖縄由来の民族文化（ethnic culture）という存在だけでなく、ハイブリッドなブラジルの国民文化（national culture）にもなっていると言えるのではなかろうか【写真2】。

【写真2】サンパウロ近郊の沖縄祭りで踊られている沖縄エイサーと担い手たち

四、当面理解できたことと今後の世界

本稿の例で言えば、たとえば沖縄に住む「在琉中国人」は、単一のカテゴリーとしての「中国人」でもなければ、もはや「移民」とも言えない「元閩人」や「元台湾人」がいた。中国の国情や原籍の有無による区別もあり、四種のカテゴリーが存在した。むろんかれらの文化は、だから初めから「同質」でも「固有」でもない。初めから「異種」で「複数」の文化を沖縄に持ち込んでいるのである。また政治的に、また便宜のうえで「日本国籍」を取得している者が多数存在した。したがって国籍の上では「日本人」である「在琉中国人」が、沖縄や日本国内にいるわけである。日本には法律上、アイヌ民族を除いて「民族」の識別がない。だから民族認識がややこしい。わたしのいう「在琉中国人」には、したがって日本国籍の者たちが数多く含まれている。本来なら「国籍は日本人で民族は漢民族」などいう表現があってもいいが、そのような識別も区別も日本にはない。

かれら「日本籍の在琉中国人」の多くは普段、日本語を話し、日本で行われるイベントなどに参加し、ときには主催している。日本文化の担い手であることに、なんら違和感はない。と同時に、故郷から持ち込んだ文化活動としての台湾や大陸中国由来のイベントも、沖縄で盛んに行っている。これもまた地元の人びとが参加できる、日本文化や沖縄文化なのである。

沖縄で元・現中国人が持ち込み、そして沖縄文化や日本文化に適応した「中国文化」を日本文化として認めないと、今度は

ブラジルの沖縄文化が理解できなくなる。毎年、ブラジル各地で行われている「日本祭り」あるいは「日本フェスティバル」。わたしの見聞した限りでは、その「日本」とは沖縄由来の芸能や踊りも含まれていたが、これらの祭りやフェスティバルは、それぞれの移民たちが毎年行っているブラジルの行事である。だからむろん沖縄の祭りも、ブラジルのイベントのなかで独自の色彩を放って行われている。こうしてみると、移民たることや原籍・出身地域、出身民族の個性や由来を無視した「ブラジル文化」というのはありえるのだろうか？

マジョリティたる日本民族中心で営んできた日本や日本文化と、民族としてマジョリティはあるが、もはやそのマジョリティだけでは国家経営はできない移民中心の国家であるブラジルとの差があると言うかもしれない。しかしその差は埋まりつつあるのが、二十一世紀の国家のあり方なのである。

なお特定民族（マジョリティ）を中心に営まれている国家の多くがヨーロッパにあるが、この世紀、ヨーロッパ諸国の対外的な努力は、人道的に移民・難民を受入れることだった。移民・難民の受け入れによっていまも、ヨーロッパ各国はテロリズムに脅かされている現実を知らないわけではない。このような政治的テロリズムとは別次元の問題として、明らかにヨーロッパ諸国は多文化主義国家、いやさらに進んで文化の多元主義を国是とする国家に変貌しつつある。そんな二十一世紀の今後を見据えて、文化的多元主義日本になった国家像や日本文化像を描くのは、ひとりわたしだけなのだろうか？